

イースター島皆既日食

日本流星研究会 殿村 泰弘(宮城県富谷町)

7月7日から15日まで、イースター島へ皆既日食の観測に出かけてきました。日食当日は天気に恵まれ、部分日食から皆既日食中盤まで雲にほとんど惑わされずに観測することができました。皆既日食中盤から終了までは俗に言う「日食雲」に邪魔をされ、後半のダイヤモンドリングは雲に隠されてしまい、完全に皆既日食を見ることはできませんでした。しかし、晴天率の前評判から観測は難しいといわれたイースター島で皆既日食を観測することができ、一生の思い出とすることができました。

1 はじめに

今回参加したツアーは、ジャパトラという日食専門の旅行会社が企画したイースター島皆既日食をメインとしたツアーと、後半にペルーを観光するツアーの2つのコースがあり、私はイースター島をメインとしたツアーに参加しました。

インストラクターは、以前誠報社に勤められていた遠藤秀氏が務められました。氏は仙台市出身で、アトム時代からの付き合いがあり、度々日食ツアーに誘われていたのですが、昨年の上海郊外の嘉興と今回の2回の参加となりました。今回のイースター島については、ツアーの参加にイの一番に名乗りを上げていました。その時点では、学校を休んで参加できるか未知数の状況でしたが無事許可がもらえ、参加することができました。

2 イースター島まで

普通は、日本から此の地に向かうのは、タヒチ島経由で行くのが時間と費用の面から有利なのですが、ランチリ航空が皆既日食期間中は、タヒチからの便を休止し、その機材をサンティアゴからの臨時便にあてる方針となり、私たちは、アメリカ経由でチリに入って、そこからイースター島に入ることになりました。したがって行きも帰りとも成田とチリ・サンティアゴの間を2晩機中に滞在することになり、帰りのアトランタ・成田間の13時間の機内ではこうして忘れないうちに「星座」の原稿を打っていました。終わらなくて、暑い日本で続きを書いています。

チリは南半球にあるわけですから、7月は冬でしたが、あまり深く考えず、上着が一枚あればいいかという甘い考えでした。1泊しかないのだから、大丈夫だろうというわけでしたが、

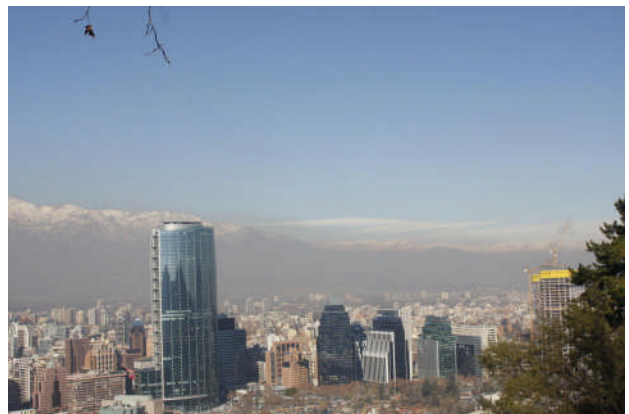
かなり甘かったです。成田からアトランタまでのデルタ航空の機内は、エアコンがガンガンかかり、風邪を引きそうな寒さ。アトランタ空港内も、外の暑さは何処吹く風のエアコンガンガン。止めは、アトランタからサンティアゴまでのデルタ航空も、寒さに震える機内。だめ押しは、サンティアゴ市内の寒さ。朝は3度まで下がっていて市内見学は、寒さとの戦いでした。



サンティアゴ大聖堂

しかし寒いのは日の当たらないところだけで、日が当たると、汗ばむくらいになります。

チリに着いた7日(時差の関係で)は、市内観光でした。チリは隣のペルーと違い、あまり観光地がないので見学するところは、サンティアゴ大聖堂、サンクリスバルの丘から眺めるアンデス山脈と市街地ぐらいなものでした。もちろん北部に行けば、「アルマ」がありますし、南部のパタゴニアも観光地として有名ですが、我々はイースター島に行くことがメインですから、市外の離れた観光地はまたの機会となります。



サンクリスバルの丘から市街地を望む

チリといえば「ワイン」です。安いチリワインが酒の量販店で売っていますが、やはり本場だけあって「おいしかった」です。またチリサーモンは、日本では「銀鮭」としてスーパーで売られています。日本と地球の裏側ということ

で、気候が似ていて、アンデス山脈にはスキーリゾートがあり、走っている車も、トヨタ、ニッサン、スズキ、マツダと日本のメーカーの車を結構見かけましたが、やはり韓国のヒュンダイは日本車以上に多く見かけました。

チリ国内では自動車工場がないので、100%輸入ということです。

さてインターネットの普及はここチリでもめざましく、ホテルでは有料の有線 LAN に接続して、日本との情報のやりとりをしまし、イースター島でも無線 LAN 経由で接続でき、リアルタイムに近い状態で日本と連絡することができました。

8日の午前中は時差調整を兼ね、ホテルで午前中を過ごし、夕方の臨時便でイースター島に向かいました。しかし臨時便の悲しさ。出発が2時間ほど遅れ、イースター島に着いたのは、現地時間の10時過ぎになりました。

臨時便とはいえ、ランチリ航空の B767-300ER は、パーソナルモニターを備え、シートピッチもデルタ航空のデトロイト-サンティアゴ間の B767-300ER より広く、一番快適でした。

サンティアゴからイースター島まで、約4000km離れていて、飛行機で5時間かかり、しかも時差が2時間あります。

ここで、時差の確認をします。

日本	0 h
アメリカ・アトランタ	-13 h (サマータイム)
チリ・サンティアゴ	-13 h
チリ・イースター島	-15 h



イースター島へ向かう飛行機のナビ画面

イースター島は、日本の利尻島ぐらいの大きさの島で、南太平洋の絶海の孤島で、周囲1000km円内には人の住む島はありません。スペースシャトルの緊急着陸に対応した3500mの空港を備えています。空港は町の中心の南部に位置し、現地語でラパヌイと呼ばれています。住人のほとんどがこのラパヌイに住み、携帯電話の電波もこの市街地でしか届きません。ですから複数で出かけないと、救助を呼ぶことは、自分の足で市街地まで歩くことになります。また島の道路は舗装された道路は、島の中心と北

部のアナケナビーチを結ぶ道路など限られ、市街地の道路も未舗装が当たり前です。したがって、雨が降ると道路はぬかるみ、スタックにはまり車が立ち往生という事態が起こります。これは島全体が世界遺産に登録されているために、舗装などの環境の改変が行いづらいということにも起因しているのかもしれませんが。またモアイより高い建物を建てられない条例もあり、島には平屋建ての建物だけしか建てられません。そのために見晴らしは最高です。もっとも、高い建物を建てたら、この島独特の強風に耐えられないかもしれません。それくらい風は強いのです。風に向かって歩けません。

イースター島に着いたのは夜でしたが、空を眺めると南天の星がたくさん見えました。しかしすぐに曇るなど、天気の変化が激しいことがわかりました。ホテルに着き、早速無線 LAN に接続しましたが、なかなか安定して繋がりません。何と云っても島外への通信は衛星回線を利用しているわけですから、気長に繋がるのを待ちました。そんなことをしているうちに外に出ると、雲が晴れ、さそり座が天頂近くに輝いていたので、早速固定撮影を始めました。すると、雲が飛来して邪魔することに。晴れ間を見つけながら、さそり座と沈むはくちょう座の十字を撮影して終了。そうこうしているうちに、激しい雨が降り出しました。とにかく雨具は手放せません。風が強いわけですから、傘は役に立ちません。

ネットにつながながらメールをチェックして、2時頃に休みました。7時過ぎに起きると、電気がつきません。そう電力事情も安定していないのです。島には火力発電所があり、そこで発電をしているのですが、この日食に向けて、多くの観光客が来るわけですから、容量がオーバーするのでしょうか？

ここに住む唯一の日本人ガイドの最上さんによると、「停電はよく起こります。でもいつ復旧するかは、誰もわからない。いつの間にか回復している」とのこと。実際今回の停電は、私たちが、島内観光が終わって戻ると、回復していました。そして島を離れるまで幸いなことに二度と起こりませんでした。

私たちが案内してくれるガイドの最上さんは、イースター島の魅力に惹かれ15年前からご夫婦で島に住んでおられます。地球の歩き方などでも紹介されていますが、モアイについて島の博物館にある日本語の解説書は、最上さんが作成されたものです。他のツアーでは、現地のガイドが添乗員の通訳による解説なのですが、私たちは最上さんの日本語による解説を直接聞くことができました。モアイのこと、島のこと。諸説あることを説明され、その事実は、島に残る文字を読むことができる人がいないために確証は誰にもわからないこと。諸説の中から私た

ちが感じたことが、事実なのかもしれないことなどを話され、納得しました。最上さんには滞在中大変お世話になりました。他に読売旅行やユーラシア旅行社が同じホテルになりましたが、この3つのツアーだけが、日本人のツアーで島に滞在したグループのようです。他のツアーは、タヒチやサンチアゴからの日帰りツアーで、島の中心部にあるタハイ儀式村などまで空港から20分以上も舗装されていないでこぼこ道(雨が降ればぬかるむ悪路)を重たい荷物を持って(あるいは引きずって)移動することになったようです。幸いにも、当日は晴れたので結果オーライでしたが、我々はバスで島内各所に点在するモアイの殆どを目にすることができました。これも日帰りツアーでは難しいことでした。

3 イースター島(2日目)

現地時間10日は、皆既日食前日。雨の降る天候に、最低限の目標、島内各地に点在するモアイ像をカメラに収めるべく観光に出発しました。点在するモアイを見学は、島の博物館の見学からスタートしました。アナケナビーチから発見されたモアイの「眼」(展示されているのはレプリカ)や、ロンゴ文字で書かれた魚などの形をした木片など、イースター島の歴史を一堂に集めた資料を熱心に見学しました。しかし他



アナケナビーチのアフナウナウから発見された唯一のモアイの眼(レプリカ)のツアーの参加者も相前後して訪れるので、ゆ



ロンゴロンゴ文字が書かれた魚の木片

つくりとは見学することはできず、お土産売りに移動して、取りあえず日本へのお土産を少しゲットして、次の見学場所へ移動しました。

私は前日に遠藤さんに、「明日の皆既日食の現象時刻に、観測場所のアナケナビーチを見学するよう、最上さんに見学コースを組んでほしい」とリクエストしておきました。たとえ晴れる可能性がなくても、同じ時間にその場所に立つことで、本番のイメージが湧くと考え、無理なお願いをしました。

しかし、これが次の日の本番に役立ちました。次に向かった「ラノ・ラルク」は、モアイ像の石を切り出したところで、山全体の至る所に、モアイ像が残っています。切り出して運び出す途中のモアイや埋まってしまったモアイなど、たくさんのモアイがありました。

世界遺産に登録されているために、見学は指定された順路を通ることが義務づけられ、少しでも外れると監視員からの注意を受けることとなります。当然、モアイに触るなどというのはもってのほか。過去に日本人観光客がモアイ像を傷つけ、大問題になったこともあり、注意しながら見学をしました。



ラノ・ラルク山の斜面に点在するモアイ

ここからどのようにして巨大なモアイを運んだかについては諸説があり、最近TBSの「世界不思議発見」で紹介された方法も、諸説の一つに過ぎないということです。「謎」のままに残すということも一案かと思えます。

ここで昼食となりました。観光する場所は島内各所に点在するのですが、トイレはすべての見学場所にあるのではなく、この「ラノ・ラルク」と「アナケナビーチ」など数カ所に限られ、見学コースはトイレの場所や、休憩場所の確保などに制約され、どのツアーも同じようなコースになるのです。

渡されたお弁当は、なんと「カツライス」でした。しかもお米は日本のお米でした。宿泊したホテルでは、日本人が多く泊まるので、わざわざチリ本土から日本人シェフを呼んで、日本人好みの食事を準備してくれたのでした。地球の裏側で、日本のお弁当に出会うとは、一同感激!

午後は、本来のコースでは、ラノ・ラルク近くの日本のタダノ建設が大型クレーンを運んで修復した15体のモアイ像のある「アフ・トンガリキ」を見学するのが順番であるが、先に述べたように、翌日の現象時刻に下見をしたいという私の要望を受けて最上さんが先に、「アナケナビーチ」の「アフ・ナウナウ」を見学することになった。途中の道は未舗装であり、ぬかるんでいるためにゆっくりと走行することになる。対向車が来るとバス同士はもちろん、車が対抗してきても慎重にすれ違う。路肩は概してぬかるんでいるので、そこに入らないようお互い気をつけているためです。

現象時刻のころ、「アナケナビーチ」に到着。時々降っていた雨も、このときばかりは止み、その上太陽が薄雲を通して顔を出しました。翌日の今ぐらいの時間には、皆既日食が始まっているのだなど、思いを新たにしました。「モアイ像の上で、黒い太陽が見える！」このコラボの目撃者になれるのかこのときは、半信半疑でした。



2週間前から場所取りをしていたフランス人

「アフ・ナウナウ」のモアイの前には、2週間前から場所取りをしているフランス人がいました。彼らは2週間前からこの場所に滞在して、夜間はクローズされるので、近くに停めたレンタカーの中で過ごし、食事は土産物屋で調達しているとのこと。トイレも有料ですが、水洗ですから、結構快適な生活を送っているようです。島内では、私有地以外ではキャンプは認められていないので、車で寝泊まりをすることになったようです。また、この「アフ・ナウナウ」と「アナケナビーチ」を臨む高台一体も、規制線が張られていました。CNN かチリの放送局が特別な許可をもらって、場所を確保したとのこと。さて、こうした状況をインストラクターの遠藤さんと相談をして、明日の出発を早く場所を確保したい人と、ゆっくり出発する2グループに分かることを提案しました。

バスを2回往復することは困難なので、先発隊はタクシーを利用することとし、7時ホテルを出発し、2名から3名を考えました。

が、手を挙げたのは、私と遠藤さんだけ・・・

この2人が先発隊として翌日場所取りに向かいました。結果は大正解でした。



アナケナビーチ

その後バスに乗り、「アフ・トンガリキ」に戻りながら島の北部海岸に点在するモアイ像を見学しながら向かいますが、この頃から雨足が強まり、カップすら役に立たない状況になってしまいました。



アフ・トンガリキの15体のモアイ

晴れていたら美しい光景が広がるであろうが、吹き付ける雨に、体中ずぶ濡れ状態。カメラのレンズにも雨粒がかかり、ここだけはいい写真が撮れませんでした。

尚、この朝日は、最高と評されています。ただし島の中心部からは車でないと行けませんので、あしからず。

他にも各所に点在するモアイを見学しましたが、殆どはモアイ戦争によって、倒されたり他のモアイの材料に使われたりして、正しい形で残っているのは、ごく少数です。

私たちが観測地に選んだ「アフ・ナウナウ」は、アナケナビーチの砂浜に埋まっていたために保存状態が良く、そのモアイの像の下からモアイの眼が発見されたのです。モアイの眼は唯一残っているのが、ここで発見されたものです。戦いに勝つと、眼に存在する力を解き放つためにモアイの眼は壊されるのです。

島内観光の最後は、ガソリンスタンドに併設された商店での買い物。島内ではドルがそのまま通用します。もっともおつりは、チリペソで返ってきますが、。。。。。

ここで生徒へのお土産として、最上さんのアドバイスを受けて、チリ産の粉ジュースを各種購入しました。かさばらない上に安価。担当している3年生160名に湯飲みで少しずつ配れば全員に行き渡りそう。それにチリ産のお菓子をいくつか購入して、生徒の分のお土産は確保することができました。

ホテルに帰ってから、早速雨に濡れた体をシャワーで暖めました。事前の情報では、温水になるまで非常に時間がかかると言われていましたが私の部屋は、すぐに温水になったので、体を暖めることができました。でも末端の部屋では、苦労したようです。しかも私の部屋は、無線LANは、ロビーでしか繋がらないのですが、ロビーに近い私の部屋は、その電波を拾うことができわざわざロビーに行かなくても、快適に繋がることができました。その情報を聞きつけて、遠藤さんも私の部屋に来て繋ごうと試みますが、氏のPCは下見でこのホテルに来たときは簡単に繋がったのに、今回は繋がらず、このままの状態が帰りのアトランタ空港まで苦労されていました。

我々が食事をするレストランは、新たに増築した建物で、島の高台にあり、景色は最高なのですが難点がありました。そう雨風が、窓の上部から容赦なく入ってくるのです。風通しがいいのはいいのですがこうした悪天のときには、それがかえって仇になりました。一応季節は冬であり、体感温度は、寒さを感じるもので、慌てて上着を取りに戻る人も多くいました。

先に書いたようにこのホテルでは、日本人旅行者のためにわざわざ日本人シェフを呼んだのですが、出された料理は「今ひとつ」でした。後でシェフが「せっかく来たのですが、材料が揃わなくて、申し訳ない。」と述べたことを聞きました。食材の殆どをチリ本土から運ぶなど輸送方法に問題があるようです。イースター島内では、たいした食材は栽培されていません。牛、馬、豚がいますがすべて野生化しているので、その肉は硬くて食用に適しません。これらの動物は、土地の除草に活用されています。土地の人は殆どがこの島を訪れる観光客を対象とした仕事に従事しています。土地は国から貸与されますが、畑として開墾するものの作物が育たないとすぐに飽きる性格のために、なかなか作物は産業として育ちにくい土地柄です。

さてこの日の夕食に出された食事ですが、前菜のマカロニサラダは良かったのですが、メインの肉は、……。言葉が出ません。察してください。ということで、先のシェフの言葉が生きてくるのです。その代わり、チリワインは、いいですね。日本でも売っているようなので、今度買ってみたいと思います。

ネットに繋いで、イースター島付近の雲画像を見ると、巨大な雲の渦が覆っていました。し

かし、雲の切れ間も近い。あわよくばという期待を思いながら、明日の準備をして早めに寝ましたが、聞こえてくるのは風の音と、屋根にたたきつける雨音。ウトウトしながらも時折聞こえる飛行機の着陸音。

4 皆既日食当日

朝5時。真暗な中、他のツアーの添乗員が起こす音に気がつき、ロビーへ行くと、その添乗員が、「晴れていますよ！」と声をかけてくれました。外に出てみると、星空が！！風が非常に強いものの、「行けるぞ！」と心躍りました。しかし、次の瞬間には、雨が・・・！油断はできないものの、予定通り7時に出発する準備を始めました。

6時過ぎに遠藤さんが起きてきました。まだ暗いので、7時に出かけないつもりで起きてきたのですが私の「晴れていますよ」の声に慌てて外へ。戻ってきて「すぐ準備してくる」と言って部屋に戻って行きました。

そして、7時前。最上さんも到着して、タクシーのドライバーと打ち合わせをして出発することになりました。この頃になると明るくなりはじめ、他の参加者も見送りに来てくれました。中に差し入れをしてくれる方もいて、「感謝。感謝」。しかもパスした朝食も、ホテル側でボックスランチにしてくれ、これで、昼食まで安心。皆さんから預かった三脚を手にタクシーで出発しました。空港の前を通過すると、タヒチやサンティアゴからの臨時便が駐機している姿や、道路を歩く観光客の姿を見かけた上に、途中で戻ってくるタクシーに何度か会おうので、「遅かったかな？」と少し慌てました。

7時半にアナケナビーチに到着しました。すでは開放されていて、入り口から「アフ・ナウナウ」の前まで、機材の入ったスーツケースを引きずり向かいました。砂浜なので、車輪が砂にはまり、大変です。しかも暗い中行くので、牛馬などの落とし物にも気をつけなければなり



アフ・ナウナウの前で

ません。幸い大丈夫でした。それに思ったほど観光客の姿はなく、前日に考えていた場所を難

なく確保することが出来ました。

しかし強烈な風に準備する手も休みがち。しかもその風に乗ってきた雨粒が何度も襲いました。それでも上空の雲は徐々に切れて、青空が顔をのぞかせるように急速に天候が回復してきました。それとともに風も止みはじめ、機材の準備も順調に進めることが出来ました。

それでも風に敷物が飛ばされないように、遠藤さんをはじめ何人かが、ビーチの各所に落ちている石を集めて、敷物の上に置きました。するとその姿を監視員が気づき、遠藤さんが注意され、元の場所に戻しなさいと言われたようです。すると今度は私に近づき、いろいろ質問をされました。「どこから来たのか?」「何人出来ているのか?」「どこのホテルに滞在しているのか?」果ては、名前と連絡先の電話番号まで質問されました。そして、物を勝手に移動しないように注意して別のところに移動して行きました。

そのうちに準備をする私の機材が珍しいのか、いくつかの放送局が私の姿を取材して行きました。これが多分、日本時間の12日午後7時からのNHKニュースで放映されたものなのでしょう。そのときの私は知りませんでした。後で佐藤信氏からの情報で驚きました。勤務している学校でも話題になったそうです。

さて、写真でもわかるように今回の機材は、
タカハシFC50、タカハシP2Z、
Canon EOS 40D
(直焦点で太陽を撮影)

Panasonic TM-350 ハイビジョン
(モアイ像が暗くなる様子を撮影)

Panasonic NJ-100
(太陽画像撮影) ミニDVテープ
気温湿度計

(10分ごとの変化を記録)

以上です。今までに比べ周囲の様子撮影用のビデオカメラが1台多くなりましたが、これをP2Zの三脚に取り付けることで手で操作できるようにしましたが、このカメラの前にギャラリーがたびたび現れ、私を悩ますことになりました。

準備がある程度出来た頃には上空は快晴になり、風も止み、絶好の観測条件になりました。続々モアイと皆既日食のコラボを狙う観客が現れます。しかしこの観測地は、島に滞在してしかも車やバスなどの足の確保が出来た人だけが訪れることが出来る場所なので、大混雑にはなりません。飛行機で朝に着いた多くの人、空港そばのタハイ儀式村にあるモアイ像の前に集まったようですが、あとで話を聞くと、すごい混雑だったとか。しかも観測終了後は、他のモアイを見ることなく夕食を食べて夜中に出発する慌ただしいものでした。

第一接触が過ぎると、どの顔にも緊張感が走

ります。それまでの和やかな雰囲気とは違い、自分のスケジュールにしたがって作業を進めていきます。そんな中、私のモアイカメラの前に侵入する不心得者が！何とかどいてもらいましたが、肝心の皆既日食中にレンズの前に侵入者があったのには気づけなかった！（残念！）



部分日食とアフ・ナウナウ

部分日食の時間の天気は、上の写真のように雲は飛来するものの、観測には支障のない状態で太陽が欠けていきました。



皆既日食まであと10分

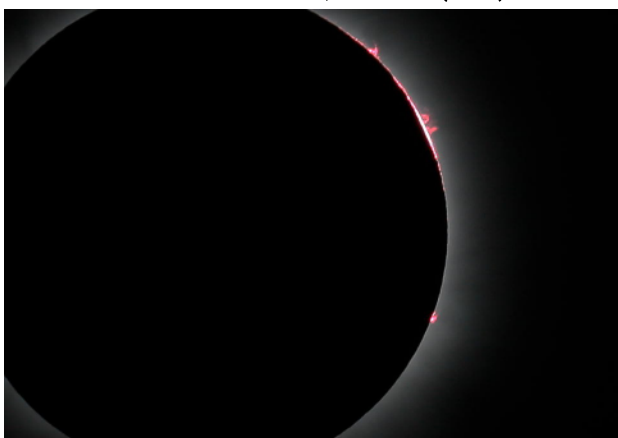
皆既日食数分前。あたりが異様な雰囲気に包まれていきます。野生のニワトリがけたたましく鳴き声を上げ、青空なのに黒みを帯びた色に変わり、肌の色も黄色みを帯びてきました。しかし、暗さは感じません。気温の低下もそれほどではありません。観客も、異様な声を上げ、あたかも人間の野生を感じさせる場面になりました。

そして皆既寸前。ビデオカメラと望遠鏡のフィルターを外し、第2接触（ダイヤモンドリング）に備え、太陽の光が細くなったところからカメラのシャッターを連続して切り、すばらしいダイヤモンドリングを迎えました。ダイヤモンドリングから内部コロナ、外部コロナを撮影するために、ビデオは回しながらカメラのシャッター速度を変えながら、その合間を見て肉眼でモアイ上空に繰り広げられる現象に感動していました。このときは気づきません。私の失敗に、jpeg,だけで撮影していたのです。Rawと両方で撮影していれば、もっと良い写真が撮

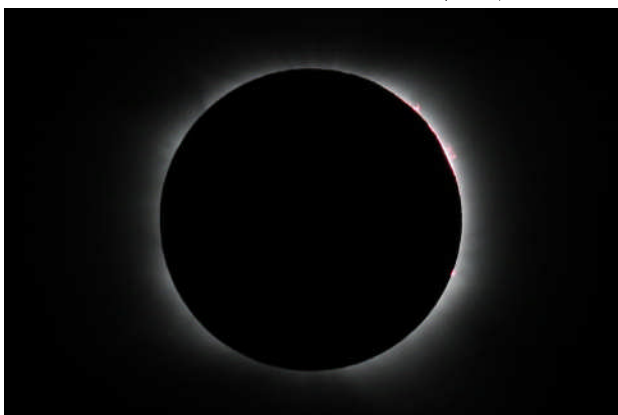
れたはずなのに！慌てていました。でも仕方ありません。



ダイヤモンドリング
2010年7月11日14:08 (LT)
12日05:08 (JST)



皆既日食中のプロミネンス (拡大)
2010年7月11日14:08 (LT)
12日05:08 (JST)



皆既日食中の内部コロナとプロミネンス
2010年7月11日14:08 (LT)
12日05:08 (JST)

残念なことに、皆既後半から俗に言う「日食雲」が飛来し、第3接触を含めて見ることができませんでした。島の南部のタハイ儀式村では、第2接触から第3接触まで、雲に影響されずに見ることができたとか。08年ロシア・バルナウルでのツアーの添乗員が、クラブ・ツーリズムの添乗員として当日の朝、サンティアゴから

の臨時便で島に着き、近くの小学校で観測するという話を聞いていたので、あとで確かめる



皆既日食中の外部コロナ
2010年7月11日14:10 (LT)
12日05:10 (JST)

と、以上の情報が入りました。

こればかりは、仕方ありません。これだけの写真が撮れたわけですから、「大満足」としなければ。朝まで大雨だったのですし、前評判ではイースター島の晴天率は、それほど期待できない情報だったのですから。

5 打ち上げ 居酒屋「甲太郎」

皆既日食が終わると、多くの人は帰る準備を始めたり、昼食を取りに木陰に移動を始めます。私は、第4接触までビデオを撮るので、必要ないものだけをスーツケースに片付ける程度でした。

第4接触が終わり、荷物をスーツケースなどに梱包し、木陰に戻ると、簡単なチリワインによる乾杯をして、奇跡の皆既日食観測を喜び合いました。

ホテルに戻り、早速日本に「観測成功」の一報を発信しました。その後の日本でのことは、皆さんごぞんじの通りです。

前々から、皆既日食の日の夜の食事は別料金で、打ち上げを行うことにしていました。会場は、このイースター島にある唯一の日本食レストラン＝居酒屋「甲太郎」＝です。地球の歩き方などでも紹介されている日本から遙か彼方のこの島で、本格的な日本食が食べられるのです。一人30ドルのお任せは、寿司、味噌汁、焼き鳥など、とても日本と変わらない料理が振る舞われました。特に味噌汁。長ネギが日本と同じでした。ただし、ビールやワインはチリ産でしたが、皆既日食の感動をそのままに食が進みました。何よりもここに今日撮った画像を見せるためにPCを持って行ったところ、店内に無線LANの電波があることがわかり、試しに繋いでいくと、しっかりと繋がりました。ただただ驚きました。



↑ みそ汁

↑ お寿司の盛合せ



↑ 焼き鳥

↑ 天ぷら (ツユも絶品)

「甲太郎」からの帰り道。重たい荷物を引きずった日本からの旅行者と思われる集団とすれ違いました。きっとこの後の深夜に出発する臨時便でタヒチやサンティアゴに戻るのでしょう。「ほとんどイースター島に来た」という状態で帰るのでしょう。私は晴れていたので、南天の星夜写真を撮りながら、流星観測を少しだけしました。そう、2日後の早朝にはイースター島を離れるのですから。

6 イースター島 4日目

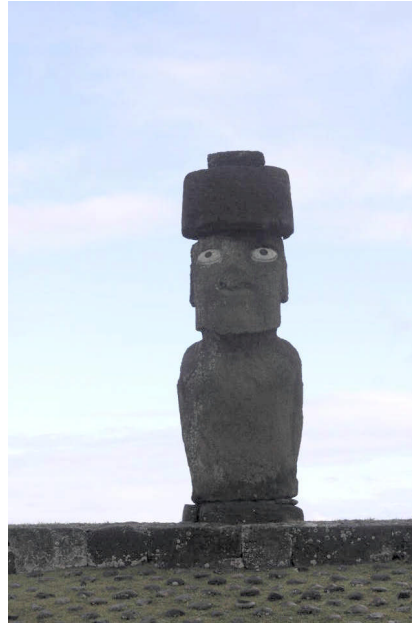
実質イースター島最終日。島の中心部や南部に点在するモアイなどを見学することになります。最初に向かったのは、タハイ儀式村。昨日は、ここにたくさんの方が訪れたとか。ネットでここに集まった多くの人と、欠けていく太陽の写真が掲載されていました。



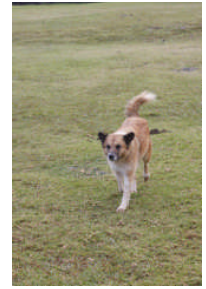
タハイ儀式村

写真でもわかるように、通り雨が見学中何回かありました。昨日の晴天が、「奇跡！」に思えてきました。そしてガイドの最上さん曰く、「この雨は、あと数分で止みます」という予想通りに雨が上がり、空には虹が……。

やはりこのモアイは紹介しないと、……。



「アフ・コテリク」
この夕日は必見の価値があります。



人なつっこい野良犬
イースター島には野生の犬も多数いて、どの犬も最上さんになついでいます。もちろんエサをくれる観光客にも。

その後、「アフ・ピナフ」に向かいます。この「アフ」は、他の「アフ」と違い、ペルー・インカ遺跡で見られる石組みになっています。



「アフ・ピナフ」の石組みについて説明する最上さん

この「アフ・ピナフ」から次の目的地に行くときにちょっとしたアクシデントが起きました。われわれの乗ったバスが、ぬかるみにはまって抜け出せなくなったのです。前進後退を繰り返しながら、駆動輪の位置を変え、およそ5分後ようやく抜け出すことができました。このように携帯の電波が届かないところでアクシデントが起きると、大変なのです。ですから他のツアーと時間を同じにして、事故を防止するのです。今回の場合も、他のツアーのドライバーが的確な指示を出し、ぬかるみからの脱出をサポートしてくれました。朝の天気は急速に回復し、一面の青空が広がりました。



ラノ・カウ山の火口湖と虹

次に訪れたのが、ラノ・カウ山。イースター島ができた3つの海底火山のうちの一つで、火口が湖となり、島の飲料水を供給しています。風の影響を受けないために、昔は作物を火口内で育てたので現在でもバナナなどが自生しています。火口湖の表面は、南米のティティカカ湖にも自生している草が覆い尽くしています。写真の火口の向こうは、太平洋です。

そのあと火口湖の反対側の「オロンゴ儀式村」に向かい、鳥人の儀式が行われた遺跡を見学しました。ここは「モアイ倒し戦争」時代以降に島の統治者を決めるために行われた儀式会場で、復元された「石積み式の家」や、レースの行われた3つの島があります。



復元された「石積み式の家」



鳥人レースの舞台となる島

午後からは、モアイの「プカオ」と呼ばれる髷の石を切り出した「プナパウ」に向かいました。

「ラノ・ラルク」と10キロも離れたこの石とを、どのように運んで一緒にしたのか、遠い昔の技術に思いをはせました。

その後「アフ・アキビ」に向かいました。このモアイは、今回観測した「アナケナビーチ」が皆既日食のときにクローズするという情報が一時流れた際、モアイと皆既日食のコラボができる唯一の場所だったのです。我々は、アナケナ



「アフ・アキビ」のモアイ像

ビーチが入れないという最悪のシナリオを描き、此の地で観測する計画を立てていました。この難点は、トイレの問題でした。そのため私は、携帯トイレを準備しておきましたが、実際には必要がありませんでした。

この近くの私有地には、皆既日食当日テントがいくつも張られ、多くの観客が集まったそうです。しかし水や食事やトイレなどの点で、不評だったという最上さんの話でした。テントしかない場所ですから、当然のことでしょうか。

「アフ・アキビ」は、1960年に、古典的な道具を使って初めて修復されたアフです。自分の祖先がやってきた方向（西側の太平洋）を向いている。このモアイだけが海を向いていて、それ以外のモアイは、すべて陸を向いて立っている。

最後の見学地は、「アナ・テ・パウ」と呼ばれる火山活動によってできた天然の洞窟。島内には200以上あり、ペルーの奴隷狩りのときの隠れ家として、またバナナ、アボガド、タロ、サトウキビなど、風よけを利用して植物を植えたりした。洞窟の開口部には、調理用のかまどが残っていました。

7 日本への帰国の道

これでイースター島の見学箇所のすべて網羅しました。夜行日帰りの多くのツアーではできないことを体験することができました。しかも、それほど期待していなかった「モアイと皆既日食」のコラボも叶いました。あとは、撮影した画像と映像の編集と整理が待っています。

おっと、「星座」の原稿も……。ひたすら時間を見つけて、整理を始めなければ。

帰国の日。朝3時に起床しましたが、なんと私たちが乗る飛行機の到着が遅れ、6時半出発に変更になってしまいました。朝食は機内食になる予定が、ホテルが気を利かせてくれ、パンとハムなどを出してくれ、出発までの時間を過ごしました。

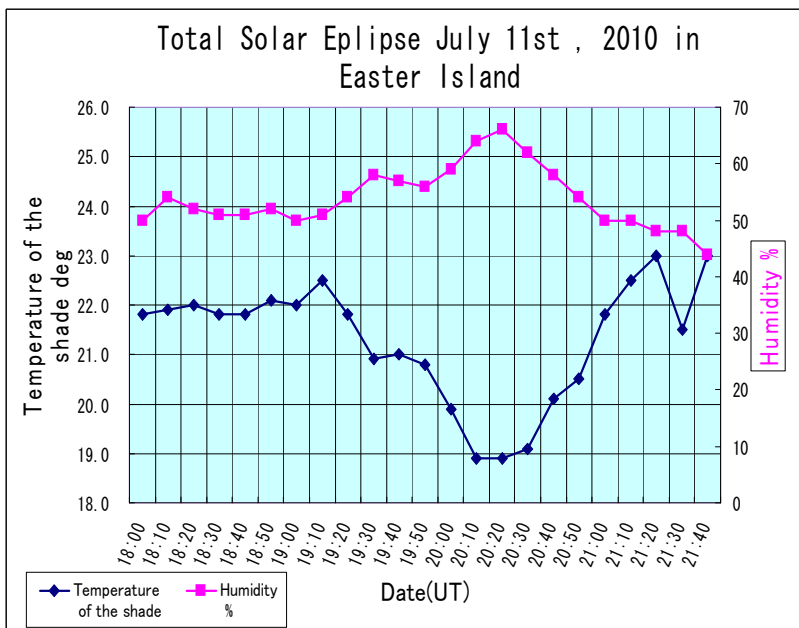
われわれの乗る飛行機が遅れた原因は、1機の機体を臨時便として、サンティアゴとイースター島をピストン輸送のように使っているのが、片道5時間かかるこの距離で、遅れを回復することは至難でしょう。

その結果、サンティアゴでのワイン工場の見学がパスになり、サンティアゴに着くとすぐに昼食を食べて、近くのワインセラーにワインを

仕入れに行く人や、慌ただしい日程をこなしました。サンティアゴでは部分日食は雨で見られず、ワールドカップの中継に釘付けだったとサンティアゴの日本人ガイドが話してくれました。が、ユーチューブに私と遠藤さんの姿が流れていたと、デジカメでパソコン画面を写したものをを見せてくれました。

ここまで、私の顔が、・・・と驚きました。

イースター島を出て、48時間後。ようやく成田空港に着きました。2日間、冷房が効いた飛行機の中やアトランタ空港で過ごした身に、日本の暑さはこたえます。それでも帰国した日はそれほど暑くなかったのが幸いでした。



Date	L.T (UT-6)	U.T.	Temperature of the shade	Humidity %
Jul. 11	12:00	18:00	21.8	50
Jul. 11	12:10	18:10	21.9	54
Jul. 11	12:20	18:20	22.0	52
Jul. 11	12:30	18:30	21.8	51
Jul. 11	12:40	18:40	21.8	51
Jul. 11	12:50	18:50	22.1	52
Jul. 11	13:00	19:00	22.0	50
Jul. 11	13:10	19:10	22.5	51
Jul. 11	13:20	19:20	21.8	54
Jul. 11	13:30	19:30	20.9	58
Jul. 11	13:40	19:40	21.0	57
Jul. 11	13:50	19:50	20.8	56
Jul. 11	14:00	20:00	19.9	59
Jul. 11	14:10	20:10	18.9	64
Jul. 11	14:20	20:20	18.9	66
Jul. 11	14:30	20:30	19.1	62
Jul. 11	14:40	20:40	20.1	58
Jul. 11	14:50	20:50	20.5	54
Jul. 11	15:00	21:00	21.8	50
Jul. 11	15:10	21:10	22.5	50
Jul. 11	15:20	21:20	23.0	48
Jul. 11	15:30	21:30	21.5	48
Jul. 11	15:40	21:40	23.0	44

今回の皆既日食の気温と湿度の変化を10分ごとに記録したものです。望遠鏡の三脚につけ、直射日光が当たらないようにした気温湿度計で測定しました。

今回の皆既日食では気温の急激な変化は起こらず、3度ほどしか変化しなかったために、望遠鏡のピントがずれるハプニングもありませんでした。08年のロシア・バルナウルでの皆既日食では、8度も下がったために、部分食のときにあわせたピントでは皆既日食ではピンぼけになった苦い思い出があります。

今回は写真で紹介したように、直焦点で撮影した画像を、拡大しても遜色のない画像に仕上がりました。

(2010年7月28日記)